

道磨さんの歌

田中道全集 解釈編一

田中道磨翁顕彰会

養老町教育委員会

平成二十一年十月

田中道磨翁肖像画（部分）



天明三年（一七八三）六十歳 剃髪して名を「道全」と改めた
その頃の頭巾を被り、本を見ている姿を写したものであろう。
（本居宣長記念館蔵）

田中道磨公翁略伝

享保九年¹⁷²⁴美濃国多芸郡榛木村(現在岐阜県養老郡養老町飯木)に
生ずる。幼名茂七。九丈頃より歌をつくり始める。学問好きで大垣俵町
の平流軒という本屋に奉公する。

宝暦元年¹⁷⁵¹二十丈頃より歌と詠むことも本と読むことも止めて屋根葺きの手伝
や土木工事に従事。三十六丈頃には薩摩義士による宝暦治水工事
が行われたので地元の若者らと参加。が一時中断した勉学への志は
捨て切れず仕事とやめ東海道上山宿の駕籠かきとなり。会う人々を
頼りによい先生とみつけることにつとめる。

宝暦七年¹⁷⁵⁷三十四丈彦根の大菅中養父千之先生にめぐり合う。また
豪商納屋七右衛門の篤い援助を受け学問の道に専念する。

宝曆九年¹⁷⁵⁹ この頃尾張国名古屋に住む。一時大阪にも、国学の講座を
開き、もうまくいかず、商家の使用人として苦勞する。

安永元年¹⁷⁹² 四十九才、名古屋小桜町靈岳院の傍の桜天神の社僧となり、国学
研究の塾を開く。次第に講筵に連る人がふえ、一時は三百人を越えるほど。

安永六年¹⁷⁹⁷ 五十四才、松阪へ出て、本居宣長先生と対面。帰郷後、万葉
集に、その質疑と開始する。

安永九年¹⁷⁸⁰ 五十七才、再度松阪を訪問。宣長の鈴屋門に入門。

天明元年¹⁷⁸¹ 道麿社中、賀茂真淵先生十三回忌靈祭を行う。

天明三年¹⁷⁸³ 六十五才、二月六十の賀、剃髪して名を道全と改める。

天明四年¹⁷⁸⁴ 六十六才、十月四日、名古屋長者町常瑞寺にて死去。

ごあいさつ

養老町は古くは多藝郡と呼ばれており、はるか昔から多くの先人の努力によって発展し、今日の養老町の姿を築いてきました。中でも現在の養老町飯ノ木でお生まれになつた田中道麿翁は、幼少の頃より向学の志厚く、独学で国文学に傾注され、その発展に大きく寄与し、今日の国学の礎をつくられた養老町が誇る先人の一人であります。

その業績は、国学四大人の一人である本居宣長が名古屋での日本古典の学問は道麿の努力で始まつたとその功績を讃えるほどであり、養老町ではこうした田中道麿翁の功績を顕彰し、永く後世にその名を伝えるため、昭和三十二年七月田中道麿翁顕彰会を結成し、長く田中道麿翁の顕彰を行つて参りました。

平成十九年には国学の研究において大きな課題とされてきた田中道麿翁の歌集である「田中道全集」を現代語に訳した「原文筆写 田中道全集」を刊行することができ、田中道麿翁生誕の地である養老町からこうした成果を公開し、偉大な功績を後世に伝えることができました。

そして、この度その続編として新たに田中道全集の解説編を刊行することになりました。その内容は今後の国学の研究の発展に大きく寄与できるだけでなく、広く一般の皆様にも田中道麿翁の人柄を知っていただく上でも重要な役割を果たすと確信しております。

こうした成果を世に送り出すにあたって、多大なご尽力をいただいている当会副会長の山口一易氏に敬意を表するとともに、本書がより多くの方々に利用され、そして私たちの町に先生の後継者となるべく第二・第三の学問を志す人物が現れ、いつまでも養老町が繁栄することを願ひましてごあいさつとさせて頂きます。

平成二十一年十月

養老町田中道磨翁顕彰会

会長（養老町長） 稲 景 貞 二

例言

- 一、本書は田中道麿翁の歌集「田中道全集」に収録された歌の一部について、解説を加えたものである。
- 二、本書の執筆は田中道麿翁顕彰会副会長山口一易が行った。
- 三、歌中の旧字体漢字及び変体仮名はそれぞれ現代通用の字体に改めた。ただし、一部については原文のまま掲載したものがある。
- 四、一首毎に歌の作成年代と道麿翁の年齢を記載し、歌の下部には原文筆写草稿田中道全集に記載した整理番号を記入した。
- 五、読者の便宜を図るため、一部に括弧で漢字を補った。
- 六、筆者が解釈した歌の大意を、その左側に記載した。ただし、歌の解釈には幅があり、十分に説明できていない部分がある。

目次

はじめに	……………	一頁
道全歌集について	……………	四頁
いろいろの物の名を詠み込んだ歌	……………	九頁
田跡の山川を読んだ歌	……………	二四頁
対のものを詠んだ歌	……………	二七頁
特殊な詠みの歌	……………	三〇頁
折句	……………	三三頁
千之先生とのつながりを詠んだ歌	……………	三八頁
同じ文字あるうた	……………	四六頁
時候生活を詠んだ歌	……………	六五頁
本居宣長とのつながり	……………	七八頁
旋頭歌	……………	八三頁
長うた	……………	八五頁
あとがき	……………	九三頁

はじめに

且裏に道全歌集原文筆字を試みたが、これでは専門に研究する

人はさかしく一般に受け入れられないと思つた矢先 松阪の本居記念

館と訪ねる車中で道磨公羽頭彰合事務局の中島和哉氏より

歌集と纏めて地域の人々に親んでもらうために又学校の児童生徒

たちにもわかりやすく解説的なものをつくってほしいと要望された

将又 記念館で先きに御懇篤な指導を給つた吉田悦之先生

からも、「歌集を通して田中道磨さんとはえな人だ」とみんなに
理解してもらったことが道磨さんと生んだ地元として大切なことではな
いか、そのために誰にでも親しみやすいことばで紹介すべきだ。今では
養老町だけにしか残らない田中道磨さんの名を顕彰会として大
事に大事にしてほしい」と繰返し要請された。

この二氏のわが事も私の思ひも同じだったことに力を得て全く不勉
強のまゝして古い時代のことは詠み振りその意味と十分解

する力を持たない者、無鉄砲極りないことと承知の上でこの大
きな仕事に挑戦することにした次第。老て怖もの知らずとは
いえ、恐れ入る次第。道磨さんから誤解も甚しいと叱責さ
れることを覚悟の上である。

あわぐと貪りき力ふりしほり

許させ給えと繻く歌集

一易記

道全集集について

万葉集の研究の第一人者と評されている道麿さん・粗衣・粗食
事も娶らず、子もなまらずひたすら膨大な数のしかも多種に亘る万
葉集に明け暮れたであろう生涯の中でつくられてきたうた
少斗時代からうたをつくらせたといわれるが一生を通じて絶えず作歌
を続けていらしたのであろう。かの道全集集に載っていないうたも遺され
ておりその数は莫大な数に及ぶのでなかろうか

よく判らないまゝ、道磨さんのうたは今日の歌風とはちがう、晩年
師と仰がれた本居宣長先生の歌風と少し違う様に思われる。

芸術性に富んだうたではないとの評もある、やはり万葉集のうたに
近いだろうか、素朴で生活と素直に詠い上げる外物の名などを
詠い込むあそび、戯れといった諧謔性、おだやかな心温まる予え
アラスな思いのうたもある

ともあれ道磨さんにとそうたは生活の慰み、趣味、いや学問

研究の源泉力であつたのではないだろうか

道全集に収録されている千首ほどの歌は、短歌、旋頭歌

長歌の三つの歌体に別けることができる。そしてその殆どは短歌形式の

ものである。また歌の内容から相聞（互に消息を通じ意志を伝える）、

挽歌（故人の追憶のうた）雑歌（相聞挽歌以外のもの）に分けることも

できようが、内容を深く読み取ることは至難なことである。

短歌について記されている歌題のもとに物の名を詠み込んだうた、

ふるさと田跡の山川を詠んだうた 折句とつた形式のうた 生活時
候とよみ込んだうた……と多種 特に学問研究の道を拓ってもらった
大菅中義良父千之先生との絆 念願叶て入門を許された本居
宣長先生とのつながりの深さに心を惹かれる

不纏のまゝ万葉集等の研究に日夜専念する傍らによもえ
な多色彩なうたが詠めたものだと言官感心するばかりである。

山口一易記

いろいろの物の名を詠み込んだ歌

物の名を数多く詠み込んだ歌

国名

能登 大和 若狭 豊 安芸 紀 但馬 甲斐 志摩 佐渡
野^のと山^{やま}とわかせることよ 秋霧^{あきぎり}の立^{たち}まかいてしまふ^{さど}国^{くに}の里^{さと}

安永五年 秋霧が立ちこめて野と山との区別がつかなくなりました。

虫喰

出雲 伊豆 甲斐 大和 信濃 出羽 伊予 陸奥 紀 安芸
いつもいつも境山^{さかいやま}とし名のたてはいよ、てらさむ^{つき}月の秋^{あき}には

天明元年 境山、山の名が境界にある山か。境山と呼ばれている山 秋にたれば
月が一層美しく照らしてくれらるることにより。

各種

馬 鯉 臺の 猫み 檉 獵やま 獲え 獲 蛙 蝦 蜻 松 枹 桐 榴 鯉 鴨 藻

うまよけの三室山こかえろ目ひとまつとちぎりし君きみ恋こいしきも

明和八年 88天 山と越えて帰ってくる目と待てますと約束したあなたのことが恋しく思われます。早く帰れる目と待ちのぞんでます。一般に使われない呼ぶ名。漢字が多く使われています。

(402)

蚊 桑 雁 蝮 蟻 蚊 蚊 河 貝 鯉 鯉 菜 此 菜 藻 河 豚 鳥 鴉 大 牟 螺 鳥 毛 虫

かくはかり水みづのみなわにこはくもふくからすまし秋あきの川風かわかぜ

前と同様 明和八年の作。むかしい名前とたくさん使っておりますが、歌の意は、さらさら〜と川面を吹そそ来る風も涼しい秋になりました。水〜今はみずと書きました。

(403)

獸

犬 猫 猿 狢 鼠 鹿 象 虎 猿

いぬがみの山田も水ののらねはかこやとる(きんせなえとらせる)

安永五年のえ よくわかりません山田に水がなくて取らねばならぬ早苗も取らずに待っています。でしようか。

木

楓 松 榎 楊 枇杷 穀 桐 柴 楳

月日たつならひはたれかちきりてし花さくあつさ紅葉ちる雪

前同。春夏秋冬と月日が過ぎていくうつりかわりは誰が決めたのでしようか

草

海松 水葱 紫菜 玉不留 葱 統断 牡丹 芥 鴨頭 藻

見ろめなき野島か崎は水をふかみ所得かほに宿る月かも

安永五年のえ これといふで見るところのない野島崎ですが月のきれいな夜は深所に所と得たよばかり月が映るよとても美しいものですよ。

午 末 申 酉 戌 亥

真人はわれひつ時雨晴てるにひとりいぬなるいな(の山)に

(552)

前と同時作 旅立をしていったいとし人(いな)は降り出したしづれに一人(いな)の山(い)に
いるたろうか、どうしているたろうか。

2 物の名を詠み込んだ歌

一首の 中に なし(梨) なつめ(栗) くるみ(胡桃)

三種名 あなし川夏めきながら石間よりもりくる水の音ぞ涼き

(249)

安永五年の夏 川の水の流れ... さら〜 と石間を流る水音 心地よい涼しさを覚えます

同しくはわかしめし野に若菜つめ日にけになれかこにくるみん

(600)

明和九年 49 年 この野に若菜を摘みましよう。毎日誰かはやそ来ますよ。

一個所 たちはな

詠み込

父母の飛かけりつはくむにいつしかひなのたちはなういぬ

安永五年のえ 親が懸命に去有てた鶴も白毎に成長し一人飛立つ日も
間近かになそ来ましたよ

はぎの花

きんぎょと千種の花にせはぎ野はなつかしくのみおもほゆうくも

明和八年 88え いろくの花が所狭ましと咲いている野原をみているとふる
さどがなつかしく思い出されます

きりくす

千早振る宇治の川霧きりすらも風のまにくなひかく物を

前同 宇治川に立ちこめた霧も風にも吹かれて流されていきます

わすみ

奥山に人こそしらね住すみなれて松の山嵐あらしの音のみぞきく

明和八年 88 人の知らない様な山里にすんで松に吹く風の音ばかり聞きています

(582)

はを初はなるを果はなにながめをかけて

花鳥はなとりのねにこそなめどと思ふ盛さかと風の吹ふちらしぬる

安永五年の文 花鳥(あとり)のい声だと思おもっているのに強い風が吹ふきつけて
その立た目を吹ふき散ちてしままう... 惜あしいことです

(262)

3 動物を詠む

あまがえる

雨雲あまぐもの棚引たながくけらしさよ更ふけてこのもかものもにななくああままかかええる

(323)

安永五年ひえ このもかのもーこら側とあら側 雨雲のどんよりした夜 あらでも
こらでも雨蛙が鳴いています。

蝉せみ

そよともしも風はせふかぬ夏木立なすえ梢をゆるるせみの声かな

前同、少しも風の吹かない夏の暑い日 蝉が梢とより動かすように鳴いています。

蚯蚓みづず

あらかねの土の下にもよやうけき骨なきみくすねのみ鳴也

前と同じ あらかね粗金かたい土の意 かたい土の下の暗いところ、夏なつ文いところに
思われますが、そこに骨のないみずずはすんで鳴いていますよ。参考までに昔から、
秋の夜、あるいは雨の日などに、ジーツと細く長く、切れ目なく鳴くのを蚯蚓が鳴くと、い
つています。

雁かり

古郷といふ旅立て雁かりかねはき(今日)うしもこにわたり来つらん

安永元年夕え ふるさとと何時いつ出発したのでしようか 雁が今日にでもやそ来きう
に思えます。 雁は秋 北方から渡り来て 各地の湖沼で冬を越し、春また北へ帰ります。

(7/5)

猿さる

くもろ山に山路いゆけば岩のへに小猿つといていそはいをらく

前同 山路を通っていると山石の上に小猿が集まって遊んでいましたよ

(7/8)

時鳥ほととぎす

時今は夏なつに成ぬとほととぎす わきへの里に声かすれなく

前同 わきへー我家。 わきへの里ー私の家の近く 今いまは夏ですよとほととぎすが家近く
来て少しかすれた様な声で鳴いています。 子規ほととぎす 杜鵑ほととぎす 不如帰ほととぎす 杜宇ほととぎす とも書きます。

(807)

夕月と詠む 安永元年 99 歳

山

橋立の倉橋山とひとはいえとあかくてらせるゆう月夜かも

橋立の倉橋山と人が呼んでいる山。夕月が赤く照してとてもよい景色ですよ

(702)

海

つめよはふ岩見の海による波の夜ともみえぬ月の影かな

つめよー石葺の様に浅海の山石礁につく海苔？ 山見の海を照らす月 暗々として夜と思えぬほど輝やかしいものです。

(703)

川

のとせ川滝のせこにたつ浪を玉とみかきてる月影

能登勢川の川波に照る月 ちようど玉を磨くようできんいですよ。

(704)

池 百伝うわれの池の水面にやどるも清き秋のよの月

いろくの言伝えのある池の水面にも清らかな秋の月が宿っています。言
伝えられることは恐いことかよくないことかもしれませんがそれにはかゝらず月は水面
と清らかに照らしてありますよ。

(705)

橋

ちはやふる宇治の橋守いぢよとかけまよわたる月みてしそも

(幾千代)

宇治橋と守る人はおつと前から川に照る月を眺めて来たことでしょう

(706)

友

君やえん我やゆかんとたゆたいてあたり月よとふかしつるかも

たゆたうためらう、決心がつかない。あなたが来そくださるか、私が行きましよう
かと決心がつかずためらうそいる間に時が流れ、月ほとんど、夜を深めていそし
まいます。

(707)

雨の後の月
おもいきや日なら（ふりし雨はれて雲まに清き月とみんとは

何日も降り続いた雨もはれて思ひかけず雲間に清らかな月を見ることが出来
ました。長雨でうんざりしていた心も清らかな月と眺め晴れくしたことでしよう。

(708)

雲の間
月の

月やしろか雲や心あるたえまのみわいらにたれる影清きこそ

月や雲にも心があるだろうか？雲の切れ間から照る月。心があるそ私たちと
照らしてくれる様に清らかに美しいものです。

(709)

十七夜
久堅しきかたの月つきはききのううの夕ゆふよりいいささよよひひそそめめていいよよたたゆゆたたうう

(十六夜)

(710)

久堅一久方・月にかゝる枕まくらとは 秋の名月・十六夜・十七夜といよく美しく
輝かがやけています。八月十四日の夜と明日の名月と待つことから待宵まちよ・十五日いけうと十五夜いけう・満月まんげつ・
名月なげつ・望月もちづき・十六日の月と十六夜いざよひ・十七日の月と立待月たちまちづき・十八日の月と居待月いまちづき・十九日
の月と臥待月ふしまちづき・二十日の月と更待月かげまちづき・二十三日の月と二十三夜にじゅうさんやといっています。

樹と詠む

卵の花

とえかした荒れたる宿も此頃は卵の花垣の花の七かりは
明和七年のイ 甚れはてた家の垣根に今は卵の花が一ぱい咲いています。

(187)

竹

いつもく深きみどりの呉竹や君が八千世の友にし有らし
前と同じ 年中緑色の呉竹のようにあなたと私はいくまでも友だちであってほ
しいものです。

(190)

藤

池水の鏡にかけとろしつゝみなきりたきつ花の藤浪
前同 鏡のような池の水面にうつる藤の花房 水の色と藤の花のいろが
重なり合せて美しいさざ波が池にあふれています。

(197)

梅

梅の花さけるわきの軒けゆもふく春風は香に匂ひつ、

安永二年 卯 私家の軒の梅、花が咲き、春風がともい、匂と運んで
くれています。

(750)

松

春雨秋の時雨と年とへてみの、お山の松もふりにき、

安永五年 卯 春、秋と年月が過ぎて美濃(ふるさと)の山の松も年数と
経て、大きくなったことでしょう。故郷を偲んでの歌でしょう。

(867)

椿

みゆきふる冬にしなれはあし引の八尾の椿花咲にけり

前同、雪の沢山降る寒い冬なのに椿の花は負けずに咲いています。

(865)

山吹

妹ににる花とそみつるわか宿の垣ほにさける八重山ぶきの花

安永六年 卯 妹に似てかわい、八重山吹の花が私家の垣根に咲いています

(872)

田跡の山川を詠んだ歌

老人の若ゆてう名の滝のせはわか住里に流れこそすれ

(5)

宝暦七年ガエ彦根の大世官中養父に師事学問の道に入ることができました。
あなたのふる里はどこですかと尋ねられた時に答えられた歌です。老人が飲むと
若返るといわれている養父の滝は私のふる里にありますと。即ち私のふる里は
有名な養父のある所です。

田跡川の瀬の氷もきようとけて春はきにけり多き野の上に

(19)

宝暦九年36才 立春と題して 田跡川の氷もとけて多き野にも春がやってきました。

老人を養う御代の春にあいて名におう滝の音そそやけき

明和七年 卯亥 田跡川のうた十首の中に 老人も豊かに暮らせる時代になつて
有名な養老の滝は清らかな音に下落ちついでています

(353)

夏きではます結ぶ手の雪にもにらて清き田跡の川水

前と同じ 夏は田跡川 川の水を手に掬う その雪も溜りません 田跡川の
水は清らめで 特に夏は気持のよいものですよ

(354)

なとあれと契りし事を田跡川の滝つ瀬のことたゆと思ふな

前同 あなたと約束したことは田跡川の流る流氷のようにいつくまでも絶えないうしよ

(357)

春せれば滝つ山川に住魚のわかゆてう名そ田跡の川水

前同 田跡川にはたくさん魚がいますが 若鮎は特に有名ですよ

(358)

おちたきつ田跡の川水先汲て待えし春にわかえつみん

明和八年 紹 勢いよく流れる田跡川の水とます(一番に汲んで若返りの春をたのしみ
ましよう)

(515)

いほ万千よろずいほの年ふとも田跡のみ山(冬)のつくる日あらめや

安永七年 びえ いくくまでも田跡の山は尽きることはありませんよ

(968)

サ落たきち小雨そほふる田跡川の滝のほとりは夏も寒けし

安永八年 びえ 滝しぶきの降りかゝる田跡の滝のほとりは夏でも寒いくらいです

(992)

対たいのもの(高低深淺等)を詠んだ歌

明和九年「安永元年」の作

高低

ふりそけてみつゝあおけは久かたの天つ雲居そいよけろけき

仰ぎ見る大空 すきりはれてなんと快よいことか

(604)

深淺

名月いかりは山いかりにかくりぬ今いかりはとて我いかりもはいる草いかりの庵いかりに

名月は山にかくれてしまつて何の風怪もなくなつてしまつたので、私も小さな草いかりぶきの家いかりに入ることになりました。

(605)

朝なご和なごに水門出まゝかまいたくるいかり(錨)の綱のいく千尋ちかろとも

朝早く渚に出て深海におろす錨の綱は何十米もある深いところだす

うましつみかつかんほとの水もなし春の山田にあそぶあちむら

殆どの水が枯れて失くなぞしまいました やつと春の山田のあちむらに少しづつ残っているのと
取り集めています

遠近

みちのくの秋のもみしをみまほり都の春とけふ旅たちね

みちのく、奥州地方 東北地方の秋の紅葉をみたくなり今日都(京都)と出発(ま)した

里の名とね物語とうへもいりあふみと美濃は山もへたてす

里の名と寝物語と言う所(岐阜県と滋賀県の境の小集落)は近江の国と
美濃の国と距ておほんの隣り同志地続きですよ

旧新

昔たにあるてふしかの都(鹿)は今は七ながら秋の野らなり

昔からある鹿の都(奈良?) 近辺は今は丁度秋の千草が咲いていますよ、

(610)

あから引日影もまたすあそなま咲こそかれ朝顔の花

朝日の光と待たず(日の光があたる前に) 毎朝 咲く朝顔の花、これこそほんとうに真新しいものですね

(611)

早遅

風もよし塩もかなひわわたつみの沖ゆく船はまほにのみこそ

順風に汐流にうまく乗って大海と走る船は速くすぐ帆しか見えなくなってしまう
ます。船の速度が早いのですね

(612)

うはにうちし車とおもおのか名のうしともこそ引なやみつれ
荷物とたくさん積んだ牛車は真受きことのように牛も引きなやんで仲進みま
せん。のろくとしています。

(613)

特殊な詠みの歌

(四十七言のうた・十七文字と入れてのうた
降いて)

四十七言のうた（いろはうたに倣つて同じ文字が重複しないように）

すみの江えなる田いろ（早乙女）に（早乙女）ま（早乙女）とめ（早乙女）早稻わせう（植え）ゑ（植え）ぬ（刈り）稻（刈り）かりてよ

落穂おちほひろ（拾え）へ（拾え）子こら（拾え）そ（拾え）ゆ（拾え）しも（拾え）麦あわま（あわ）け（あわ）粟あわ生（あわ）つく（あわ）れ（あわ）や（あわ）

安永九年のうた 曲依の一連の生活とうたものでしょうか 早乙女による田植え、稲刈り、落穂拾い（昔は稲刈りとした後の残り穂と拾い集めました。それが子どもの仕事でした）その後にはまゑとサ時き、西米の取入をした後と耕し次種をまく準備としましょう。粟生、粟の生えている土地

十七文字（いふいおほをえ魚へちしつすうふてわ）
除いての歌

入くもるおほふをひえのこす魚もみつらし

い（ちうちて、われみにいかな）

明和八年 紹々 大空をのくしてしまふ様な大樹の梢 家を出て澄んだ大空と
見に行きつと思つています。

(254)

除 あまくものよそにも君かなりゆかは

たれとわさめのさとにすみぢらん

は遠くへあなたが行くまじらたら 誰と一しよに暮合しらい、のでしようか

(255)

折句 (各句の上に物の名などを一字ずつ置いたもの)

かきつばた

春日山がすがよくてらせる月影つきかげも春はると霞かすみの立たかくしつ、

宝曆十一年卯ス 春日山に照るお月様 春霞の立ちあがるのどかな朧月夜

慧星

初秋はつあきや八月はつぎの空そらの霧きり晴はれてはののかにみゆる白雲しらぐもの山

明和六年 卯ス 彗星・一面の霧が晴れて白雲のかつた山がほかに見えます

梅の花

打なみきめはる草木に野山しも春めく色と成にけらすや

明和九年 安永元年 49 一斉に芽生えんとする草木に野も山も春らしい色になつてきました。

(693)

玉椿・杜若・女郎花・藤袴・忍草の五種立てぬき

明和九年 49

玉椿

立春をまつこそ人に告にけ小花々く枝にまいるうくす

春になりましたよと雪鳥が花の咲いた枝にやうて来ましたよ

(690)

杜若 かき ぶばた

かきりなき君がみよく(御代) 伝えし 浜の砂子のたゆる日あらめや
おつと昔から君が御代は浜辺の砂子の様に続き、覚えていきます。

(691)

女郎花 おみなへし (え)

治れる御代は戸としもなき物を隔てなわてそしら川の関
平和な時代は何のへたでもなくおつと続いています。

(692)

藤袴 ふぢ ばかま

深みとり千代万代の春秋をかけてかわらぬ松の色かな
松の色がおつと変らぬ様に平和がおつと続いています。

(693)

忍心草

白雪は軒もひとつにふり積りくらせる宵の寒くも有る哉
軒と埋めつくすような大雪で、夕方は特に寒く覚えます。

あみだぶつというたてぬきの折句

天明元年

あ

東路のあかすの沼の芦の葉に嵐やきて秋は来にけり

あかすの沼の芦の葉に吹く嵐にも秋がやってきましたよ。

み

水面に見えかくれする水草もみみから秋はみと結とキ
秋かやって来ました。水草も今 実と結ぶ時です。

た

田跡川の滝つ河内の谷水はたえす乱る、玉とこそみれ
田跡川の谷水は絶えることなく滾々玉の様に光を放っています

ふ

布留の山林鹿の野辺の冬枯に故郷さむく吹あらしかな
冬枯れの時期 ふささとも寒い風が吹きあれていることでしょう。

つ

津の国のつけ野に生る露草の露をよするに月そ宿れる
津の国は今の大阪府と兵庫県の一部、津の国の一枕とは 露草千に宿る
露の玉に月がやどり輝いています。

千之先生とのつながりを詠んだ歌

秋のよの今宵は鳩の海へにもみるめのしげき月の影哉

(1)

宝暦七年 丙午 八月十五日夜 近江の海に月と見侍りて
東海道 土山 駅の轎夫(籠かき)となつてまで 良師と得んと常に向学の思いと

抱つていた時、ようやく大官中養父千之先生あると知り、早速 考根に出でその
弟子となることができた。又考根の豪商 細屋七右衛門の絶大な恩恵(三年間
細屋氏の家に住み衣食も心配なく、勉強の爲の多くの書物も手にすることがで
きた)を受けるとの好運に恵まれ、国学の研究に専念することができた。
その喜びの中に、中養父先生と共に、仲秋の名月と賞した時の歌である。
仲秋の名月の今夜、湖にあそぶたぐさ人の鳩(鳩位の大さきの水鳥、かいつぶり毛
のいき)した次女が見られると、喜色満面のうた、 歎ま喜勇躍の心とうたった
歌といえましょう。

滝川の流氷をとめてといこかし共に八千代を若えつゝみん

(12)

宝曆七年の作 滝川の流氷を止めるように千之先生といつまでも 若くありたいものだと、
先生と一緒にいや教えと受けられる日がいづまでも 続いてほしいと願われてのうたでしよう。

頼こし春は暮にや、田跡川の滝もや君を待つゝあらん

(14)

宝曆八年の作 前書に「千之此春見えたまわさりけんば」と

春が過ぎ夏になつてしまつたのだが頼りにしている千之先生はどうされたのであつたか私ばかりではありません。田跡川の滝も先生の安否と気遣ひをします。

人とわねわが宿なから秋きては音信おとがねする秋の上風

(17)

同一年 千之先生の「秋もまたりたり至らぬ此頃には音し立せぬ秋の上風」と詠み玉うと美次と前書して詠まれた歌。めつたに訪ねてくる人もない私の家ですが、秋になつてようやく秋に吹く風がヨサわてくれるようになりました。

あふみてふ名はいにし(近江)にうつりゆきてあはての森に恋つゝさふる

なか／＼お会いする事ができませんけれど近江といふことは聞いたたり目にしますと千之先生はじめお世話話になつた方々が偲ばれ懐しく又恋しく思われます。

別れつゝあはての森の露霜にぬれてかわかぬ我袂哉

宝曆九年卯ノ 尾張の国に移り住んで近江の国を回想しての歌。先生にお別れして淋しくてちよつと雨路や雨相にぬれた様に私の袂は乾く時がありません。

ありとたに人こそしらぬ栗の花さけとおのれと色香なければ

宝曆十一年卯ノ 千之先生述懐と詠まれたもの、千之先生はご健在でしょうか。栗の花が咲いていますか。私との間には何の立白信もないまです。(栗の花は梅や櫻の様に余り人々に話題にされなくて、忘れられた様に咲いていることから、栗の花を歌材にされたのでしよう。)

卯月こそ来んといてし契より今年は春のをしけくもなし

(68)

宝曆十三年 知ヌ 前書に「卯月にはこむと契りし人に遣しける」と 卯月(四月)には行きますと約束された千之先生を待ちのぞんでの歌でしょう。

四月にはお会いできる、うれしい今年も春は：待ち遠しく心おぼすと思ひますの意でしょう。 九月六日 千之先生は江戸への途次尾張に道磨を訪ねられてます。

東路の旅の衣も春過て夏来にけりとぬきかうらんか

(70)

前同 江戸への旅の途次、春が過ぎ夏になりましたから衣服も夏ものに変えられたことでしょう。先生を恋う気持ち、何かにつけて強く思われてますね。

武蔵野の草の枕のいぶせていとねかゝらん君をしそ思う

(71)

明和元年 知ヌ 前書に「千之先生に武蔵によみてつかわしける」といふ心か晴れなごむしゃくしゃする。江戸に居られる千之先生へおくれた歌で江戸のお買合しは何かと不便で安眠できないのではなにかとお察ししています。

とこの山名取の川の万代にたゆる事なくあうよしもかも

(103)

明和四年 44 道磨さんはこの年の秋攝州(大阪)に移られています。その時千之先生に送られた近況報告でしょうか。とこの山・常の山・いつもかわらぬ山・名取の川・有名な川の意の、有名な山や川がいつまでも絶えることがないように先生の御高名は消えることはありません。私もご恩はいつまでも心にはしません。

手を折て君か千年とかせえそめ十つ六つとかつ得たるかも

(160)

明和六年 46 又、刺書に「千之六十加賀よみて奉る」とあるように、千之先生の六十才とお祝して贈られたうたである。先生の御年齢と指と折て六回教えました。先生いつまでもお元氣でいて下さると願いとこめてお祝いされたのです。

あふみの沖白波立ておもひ居てもそ我は君をのみこそ

(167)

明和七年 47 近江の湖の沖に立つ白波を見るにつけ私は先生のことばかり思い出し懐かしんでいます。

としの名をありのこと〜かそえきて同じ昔に若かえる君

前と同じ明和七年の作。前書目に「千之先生六十五に成玉うに奉る」と
としの名(甲子・乙丑・丙寅・丁卯……)と六十全部数えて(とまわりして昔と
同じ干支になる)いわゆる還暦の年 おめでとうございます。

我せは千の松原ふみ見つゝ万代かけて名をとめけむ

前同「千之に奉る」と前書目、千之先生は千本の松原の様に沢山の書と読破され
学と究められています。その御名はいつ〜までも残ることでしょう。

ことさへくから国のみ式島の大和国のことの甚事も

まくはしみしてふた国にふたわたらす 大菅千之の君

明和七年 幼ヌ 前書目に「千之先生に奉る」と ことさへく〜唐国にかゝる枕ことは
まくはし・美しい。短歌より文字数の多い歌。長歌でしょう。
千之先生は唐国(中国)と大和国(日本)と二つの国の言甚とみことに修得されて
いてまことにすばらしいことに思っています。

かみ山何そは有てかひそなきあふみの海しみるめなけれは

(404)

明和八年 88 又 前書に「千之に奉る」と かみ山という名はありますが、その
かひもなくこのところ 近江の湖と見る機会がありません、それと同様 千之先生に
お会いする機会もありません、お亦文やりじやいませんか、

あふみなるちの松原つはらかに君か齡を聞にたるかも

(620)

明和九年 89 又 前書に「千之先生の古ゆふるは 稀ちふ七十も今七年に成にたるかも
との給えるに答う」と つはらかにくわしく、千之の教の多る 近江の海辺のたぐさんの松
原の木のように おえと又な先生ときくようである

彦根ちのあせの君をむさし 澄かけてこおしくおもほゆらくも

(227)

安永二年 50 又 「江戸にて」と 道磨さんが江戸に暫く宿されたとき、彦根の千之
先生と俣ばれて詠まれたのでしよう、私は今武蔵野に来ています、時々彦根の
千之先生を懐しく思い出しています、

かくのみに有ける物をあぶみの海見にこもりし我背の君はや

(980)

行川の過にし君をあぶみの海へたによる浪しくくおもほゆ

(981)

この二首、安永七年おえ前書目に「中養父主とソタみたるうた」と

正月四日大嘗中養父千之先生は逝去(69ス)されているが、道全集には十月以降に師と悼むとしてこの二首が録されている。先生の逝去後暫くしてから訃報を知られたのでしよう。

前首はおえと氣とばかり思っていましたかも知れませんが、先生は近江の海に没してしまわれたのでしようか。後は流氷込む川の様は近江の海へ入ってしまった千之先生、今はたゞ波が来た／＼と空可せるのみで淋しく悲しく思われなりません。

同じ文字あるうた

一首の中に同じ文字が五個所に詠み込まれている
安永五年 卯 五十五音順に一首ずつ

あーこ春十首

あ。

あ。ら。玉。の。春。と。あ。け。ゆ。く。あ。した。よ。りの。と。け。く。も。有。か。あ。め。の。か。く。山。

あめのかく山、天の香具山、奈良県にある大和三山の一つ高さ148メートル、古歌に多く
うたわれている、朝日に照らされる静かに明けていく元日の朝、光に照らされる香
具山、まことにのどかな景である。

い
春のいろのいたりにけりな泉川岩間の氷今はとけつ、
だんく春めそ来て泉川の岩間に張りつめていた氷もつけつあります。

う
うれしくも春日うらくに梅咲けは打あふきつ、鶯なきつ
うれしいことだ。うらかな春の日に梅も咲いたよ、鶯も鳴いているよ。

ゑ
ゑか、けや何とゑけみに植置し花の梢のうくすのこゑ
以前に植えておいた木に花が咲く様になり、鶯が来て鳴くようになりました。

と
風とたにいとしい物を賤の男か盛の花を手折てそゆく
賤の男、いやしい身分の低い男、いとしいかば、かわいがる。風さへも心してかばうように
吹けてきたのに、心ない田力が来て、咲きほこっている花を手折ってしまった。

この二首は
わめうゑを
入れる様書き
込んでありました

か 朝日^{あさひ}の^がと^がかに^がみ^がえて^が春日^{かすみが}なる^が三笠^{みかさ}の^が山^がに^が西^{あすみ}段^がたち^がけり

春日なる三笠山一奈良県にある三笠山 春日神社近くにある山 高さ282メートル のどかー長閑 のどかな春の日 朝日に輝やく三笠山には西段がたちこめています。

(272)

きん。 きのつ^{きん}みよ^{きん}この^{きん}かわ^{きん}きし^{きん}に^{きん}きの^{きん}う^{きん}け^{きん}ふ^{きん}咲^{きん}きて^{きん}白^{きん}る^{きん}山^{きん}吹^{きん}の花

きんごらんよ。この川の山岸に昨日あたりから山吹の花が咲き白くしていますよ。

(273)

く 北^くへ^く行く^く雁^くさ^くな^くく^くなる^くか^くくて^くしも^く秋^くくる^くのみ^くや^くち^くあ^くひ^くけ^くらく^くも

雁は秋北方から渡り来て日本で冬を越し春また北国へ帰るを言います。今、北国へ帰るを行く雁も秋には又やそ来ますと哲言しているようです。

(274)

け
池(いけ)にすむをしけ。春も(今宵)けふとてや雨あめ段だんとわけて立た帰かへりけん

をしけきり渡り鳥のおしどり(如鳥登鳥)と惜しいと兼ねているのでしよう。日本の池沼に住んでたおしどりも今日限りで雨段とわけて遠く北国へ帰らねばならない。夕残りも惜んで出発したことでしよう。

(275)

こ
こむ年としもあれとこのししの此こ春はるは(今宵)こよいはかりとのころはかなや

また新しい年がやってきましたが今斗はもう今夜限りで終りになります。なんとなく心ざみしいことです。

(276)

セーぞ夏五首

さあ。衣けぬぎか(て)してもなと去りにし春のよらに恋しき
麻の着物に今朝着替えたのですが何となく過が去つた春が恋しく思われます

(277)

し
今。は。し。青。か。く。山。に。白。妙。の。賤。か。衣。し。ほ。し。つ。ら。ん。か。も

青々として来た瑞々しい山と北月景に民人の白い着物が乾される様になりました。

(278)

す
鶯。の。か。り。す。巢。立。し。時。鳥。五。月。の。山。に。た。す。し。は。な。く

ほととぎすは「てっぺんかけたか」と聞きならされ昼夜とも鳴く小形の鳥ですが自分の巢とつくらず、鶯やみそさいの巣に卵を一個ずつ預けて育ててもらおうと語り、歌意は、鶯の巣に穴自ら巣立つたほととぎすが五月の山に絶えず鳴りつていきますよ。

(279)

せの^せとせ^せ川^せ瀬^せのい^いせ^せきの^き水の^の音^のに^に梢^のの^の蝉^のの^のき^きお^おいつ^つなく

能登川の瀬音に同調する様に蝉がはげしく鳴っています。

(280)

そ^そけ^けふ^ふこそと^と袖^のふ^ふり^りは^はへ^へて^てみ^みそ^そき^きする^るそ^そが^がの^の川^の原^のに^に夏^のそ^そ暮^るぬ^る

仲々できなくて 今日こそ実行せねばと袖をしぼって 襖(河水で身を清めること)をするにしました。 そのそがの川原に夏の日が暮れてゆきます。 もう夏も終りです。

(281)

たぐの秋の十首

て 見てもこよひそてのみひちてなごせまぬ姨捨山にてる月影

姨捨山(老人と捨てたという山)と照らしている今夜の月。見ていると何となくうら悲しい
思いにわられ、一人袖を抱いて慰めをしています。

(285)

とこの山林の里の秋の葉の色つく時もわれひとりぬる

林鹿の村の秋の葉の色づきはじめ寒くなってきましたが私は一人暮しています。

(286)

な 奈良山の嶺に鳴る鹿の音になはたけゆく秋そかなしき

奈良の山々に鳴る鹿の音が郷音き渡る秋はなんとなく物悲しくおもわれます。

(287)

に
新田秋の紅葉のからに(唐錦)いほ(五百重)色ます朝に日にけに

新田山の秋の紅葉 唐錦の様に色とり／＼に濃く色を増し、朝日に昼の陽にまことに美しい極みです。

(288)

ぬ
秋の葉のおらぬ錦にたちぬ衣とらしぬ布引の滝

布引の滝、神戸六甲山南麓にある滝。花崗岩の白い肌とサ落する滝が白布と引いた様に見えるところの名がついた。布引の滝というのは紅葉した葎の色など使わず晒した白い布と引いた様な滝です。

(289)

ね
かねの峯に暮行秋をとめかねかねてねとのみ鹿の鳴らん

秋の夕暮が深みゆく秋のどららにしても時の流れは止めることができないものです。どんどん移そゆく月日……鹿がこの情を寂しめて淋しく鳴っています。

(290)

の
おのつから秋の形見におく物か我衣手の露のしらたま
飛路の白玉 秋の形見のように私の衣にもやどりひかっていますよ

(291)

はーほ冬五首

は
冬ふゆきてはままなく時雨しぐれで柞葉はほそはの落葉おちひたせりままなく時雨しぐれで
冬になると時雨ることが多くなります。過ぎ去ったかと思つと又しぐれきて柞の葉と
あつていきます。柞ーミならくぬぎ。おふならの総糸。柞葉ー柞のは(お葉)

(292)

ひ
 大(冷)ひえやをひえひらのね(争)あらそひて日ひ毎ごとに雪の積りけるかも
 冷ひえ込みが強かくなつて来て、まわりの山々が競あひつる様に毎日ごとのように雪が降り
 積り、そのかさとふやしていきます。

(293)

ふ
 不破ふの山麓ふもと流る、藤川ふじがわの淵ふちには雪のふれとたまらず
 不破山の麓麓と流れる藤川の淵には雪が降っても降っても溶けて流れて
 しまつて雪はたまりませんよ。

(294)

へ
 とひく(き)人ひとをこへみゆきへてたてつ(ま)ひな(ま)の家いへ居ゐいたくとふ
 しも
 訪たねたいと思おもう人ひと々々も雪に降おられてしまつて、人里ひと離はれたところ暮く暮ぐは
 大おへん(き)淋さしいものですよ。

(295)

ぼのぼのとかすのる月に大原おほはらや朧おほろの音水おほろほかならすみゆ
大原―地名か、広々とした原っぱか、朧月の照らしている広野の中と流れる川は
澄み切った音に流れています。

(296)

まよ恋十首

まよまよにおのか真袖まよとしほるまでまたみぬ人にこひわたる哉
聞くだけでまた会ったことのない人ですが恋しく思われ袖としほるほどです

(297)

み
あふみの海なからのみわの山桜霞かすみのまよりみてし人はも

琵琶湖の畔の山に咲く桜のもとで霞の間よりかいま見た人が恋しく思われ
てなりました

(298)

む
むさし野の頼たのしの里の頼むむすかな結むすふちきりのむむすなしからしと

武蔵野むさしの(田園名・今の埼玉県・東京都) 武蔵野の頼の里の名の様に
結んだ契ちぎりはいついつまでも無にしないようにしつかりと結ばれていたいものです

(299)

め
夢ゆめうつろふためかぬてそまどふめるみるめの浦うらのみるめなまむと

夢をみているようで決めかねて迷っています。みるめの浦といいますが、みる目がなく
て迷っています

(300)

も
から(唐)夜(三)日も夕(三)せいは片(三)む(三)ひ(三)に思(三)ひ(三)み(三)たると妹(三)し(三)る(三)らめや

夕方になると尚一層片想(三)い(三)にあなたと恋しく思(三)う(三)のですが、あなたはわかつていてくれるでしょうか。

(301)

や
しる(三)や(三)い(三)か(三)に(三)こ(三)え(三)つ(三)君(三)を思(三)ひ(三)やる(三)山(三)の八(三)尾(三)も八(三)重(三)の塩(三)路(三)も

あなたと恋(三)い(三)思(三)う(三)気持(三)は八(三)つ(三)の山(三)・八(三)つ(三)の海(三)も越(三)え(三)る(三)ほど深(三)い(三)く(三)もの(三)です、それほどにあなたと思(三)ひ(三)つ(三)ている私の気持(三)とわかつてほしいものです。

(302)

る
雲(三)居(三)には雲(三)る(三)霞(三)る(三)居(三)る雲(三)の立(三)ても居(三)ても物(三)を(三)こ(三)そ(三)おも(三)

雲(三)の(三)間(三)に(三)い(三)ても霞(三)の中(三)に(三)い(三)ても……何(三)処(三)に(三)い(三)ても何(三)と(三)して(三)い(三)てもあなたのことと思(三)つ(三)て(三)い(三)ま(三)す。

(303)

ゆ歌なし

記載されていません

え 関^{えん}えにしえま^{くも}おもほえす^雪にとたえし^途逢坂の山

よくわからない字句がありますが、関所と越えて行こうと思おうのですが、思いがけない大雪で途がとざされてしまふと、逢坂山を越えることができません。

(305)

よ

月よよし夜よしとこよ^{今宵}ひわくらはにこしをよぶかく鳥の鳴くらん

今夜は月の美しい夜ですよ、ぜひお会いしたいですね……と呼びかけている様に鳥が鳴いています

(306)

らゝお雑十首

ら。老ら。くの。こ。ぬ。里。なら。は。鯨(くじら)よる。あ。ら。き。浦(うら)わ。も。い。と。は。ま。ら。ま。し。

老人にならない、いつまでも若々しく居られる。そんな所があるならば、鯨がやそくる世に海でもいとわす出かけていきますよ、そんなところがあつたらいいなあー

(307)

り。花。は。ち。り。葉。は。も。み。し。ゆ。も。な。り。け。り。盛。り。あ。り。も。た。の。ま。れ。ぬ。よ。に。

花が終り、葉が紅葉、せぬ木はないように、いつまでも盛盛りでいられる。せではありません。栄枯成敗、衰は世の常です。

(308)

る。よ。る。昼(ひる)を。わ。か。す。流。る。川。水。は。た。え。ぬ。教。の。道。に。や。有(あら。ん。

昼夜の別なく流れている川の水は休まず、学べと教えていますよ。

(309)

れ
のかれつ。かくれの山に我をれはあわれ。といて誰かといえん。
山里にかくれる様に暮白している私を憐れんで誰か訪ねて来てくれないだろうか。

(310)

ろ
白妙の我衣手に移ふや花ももみちもいろふかきころ。
しろたえ。こゝもて。うつろ。 (紅葉) (頃々)
とまぐ。なま化の色。もみじする甚ふ。…そんなたくさんの彩が私の衣にうつつて美しい
世界も展げていくれます。白妙：真白。純真な無垢の私の心といろくの花やもみ
じが耐めてくれます。…といった自然へのよろこびでしようか。

(311)

わ
吾妹子にわかれて我はわさみ野の草の枕の旅そわひしき。
わがこゝも。わがれ。わがれ。
恋しい人に別れての一人旅。わさみ野(地名?)に旅宿としてあります。何とも淋しいものです。

(312)

る。沖の井の田舎家居の筒井には冬しも終に氷るさらむ。

沖の井（地名？、遠くのことか？）田舎の家の竹筒形（田形）に掘られた井戸では冬でもすくと氷が張りませんよ。清らかな水が年中湧き出ています。

(313)

う。うつせみのうけきうきせを愁へてもそをしもたれか恨けてたる。

うつせみ、蝉のぬけがら。うき世をなげき、非心しみなやんども、どうにもならないこと。誰とうらんでみても仕方のないことですよ。

(314)

え。難波江をこえつる住の江の松は幾千代よた聞えけん。

難波江、大阪市昔難波京のあった地方。住の江、大塚住吉区、大和川の河口附近。万葉集の歌所として知られている。難波江近くの住吉の松はいつまでも成盛治世で多々の人に知られています。

(315)

お^お大^お君^{きみ}のおほ^おみ^みめ^めく^くみに^に大^おや^やま^まとお^おの^のつ^つか^から^らこそ^そお^おた^たし^しく^くは^はあ^あれ

おたしー穩か、安定している 大君(天皇)の大きな恵みによつて 大和の国(日本)は
おたやかな、平和な国ですよ。

時候生活を詠んだ歌

古年けきありのゆう(暮果てぬきょうの朝)の春そのとけき、
宝暦十三年 知え「元日」のうた。古い年は昨日の夜で終りました。今日の朝
はもう新しい年、のどかな春ですよ。

(67)

春立といふはかりにやけきしもそまたしき声に鶯ながくも

安永六年 廿五「正月三日」 またしー全くかまだしー不十分か 春になつたといつてもまだ
寒く今朝はまだ上手ではありませんが鶯が鳴いていましたよ。

(796)

打なひきのとけき春は立物たつものをなと鶯のまなかさるらん

明和九年 卯酉「鶯のま声とまだかい」と題して のどかな春になつたのに、どうして鶯は
来ないのたろうか。早く来て鳴いてくれないうらうか。

(598)

奥山に通う山人言伝む我鶯とまちわひぬとよ

明和二年 卯酉「待鶯」 鶯がすんでいるといわれる奥山に通う人に「鶯よ、
早く来て鳴いてくれよ、来てくれる目と待ちのぞんでいますよ」と言伝け下さいと、
頼んでいます。

(82)

是も又つもれば老となる物をおもけて春をめてにけるかも

明和七年 卯酉「立春」 年を重ねると自分もだん／＼老人になつていくのだが、そん
なことは思ひれしてしまつて、春になつたことを喜ばせていますよ。

(161)

伊吹山林麓の里は卯の花のせけとも峯にのこる白雪

宝曆十一年卯酉「残雪」伊吹山の麓の村々には卯の花が咲きはじまりましたのに
伊吹山の山頂にはまだ雪が残っています。

(47)

ひそかたの日の目もみせず雲とちて空とみたる、月にそ有ける

安永五年 卯酉「五月雨」 空一面と厚い雲がとじ込めてしまふ。太陽が長く顔を
見せません いわゆる「みだん」(五月雨)の季節即です。

(350)

天の川雲立わたる今もかも犬飼星の舟出せすらし

安永八年 卯酉「七夕会」 天の川の雲、あの雲にのって犬飼星(彦星)は舟を漕ぎ
出すのでしよう。

(1000)

夏衣紐(ひも)夕去(ゆうさり)くれけしぬのめに風打ふれて袂(たもと)すしむ
(なほ)

天明元年 卯酉 綴涼(ついでりやう) 夏の夕ぐれ 次々と吹ッてくる涼しい風に心地よいことですよ。

一葉落てよ(せ)は皆秋というめれと霧立そむるきよの夕暮
(334)

安永五年 卯酉 「初秋」 木の葉が落ちてはじめると、みんな秋だと言いますが、夕ぐれには雨霧が立ち始めましたね。

秋風の吹つる(ふ)にむさしの、草はから乱れそめてき、
(341)
前と同じ安永五年 「野秋風」 秋風が強くと武蔵野の草はまっすぐな姿勢で立そいられなくて、みなあちこちに傾き乱れた状態になっています。

秋の日は短くも有か朝露のかわかぬうえに夕露おきぬ

安永元年 卯ノ「雨路」 秋の日は短かい、朝の雨路がまだ乾ききらぬうちに、もう夕方の雨路が降りています。雨路の乾く暇がない程に日照時間が短くなりました。

(713)

秋きぬとあした夕に露はおけとあつは夏にまきりつるけも

安永四年 卯ノ「残暑」 ひとなく秋めりて朝夕露が降るようになりましたが、日中の暑さはまだ強く夏日と思わせるきもがありますね。

(714)

今朝けしも寒しとおもえはうなえし庭の草葉に霜おけみゆ

明和九年 安永元年 卯ノ「霜」 今朝は寒いなと思いましたが、矢張り庭の草葉と白くする霜が降りていました。

(726)

こころすく秋におくれて咲きこのうつろえるをや盛こてふらん
明和八年 卯酉「初冬菊」 秋の終り、初冬の頃になると菊が咲き始め、その盛りには咲き満ちて色も香りも最高の輝きとみせてくれるでしょう。

(538)

夜もすからいとわす年を惜むまに更行ふけゆく鐘の曉の声

安永五年 卯酉「除夜」 一晩中寝おに年を惜んでいる間に曉方の鐘が鳴りはじめました、いよいよ新しい年がやそ来たのですね。

(383)

花ちかし枝ももみちて唐錦たつことやすき月日成かも

宝暦七年 卯酉「光陰速なると」 花が咲いたと思つた枝もすぐ唐錦のように紅葉し始めます、なんと月日の過ぎることは早いものですね。

(6)

春とももに立けるものと旅衣花橋の香にそむる哉

宝曆七年卯オ「正月より五月まで旅にありて」初春に出発した旅だがいつの間にか橋の花が咲く初夏になりましたよ。

(18)

きりくす旅の枕にはなきて夜寒の里に秋は暮にき

宝曆九年卯エ「旅宿暮秋」旅の宿の枕元できりくすすがしきりにそぞろ寒さを覚える秋も終りに近づいて来ましたね。

(20)

ほととし上をみるがといましめの言の葉残す神ぞとうとき

明和元年イヌ「日光東照宮に詣でて」徳川家康を祀る日光の東照宮に参詣し家康の「人の一生は……」の遺訓を思い出されたのでしよう。

(25)

田子の浦に釣するあまの事とわじ富士の深雪のまゆる日やある

明和二年 八ノエ 「富士の雪」と 田子の浦に釣をしてゐる海人に 富士山の雪が消える日はありますか、それはいつですかと尋ねてみましたよ。

(81)

とてゐる難波の浦に舟すて、芦のかりねの旅そ他しき

明和四年 八ノエ 「此秋攝州にいたりて」 攝州「今の大阪・兵庫」 難波「大阪市一帯の古名、難波の浦で舟を降りて芦の茂っている所に仮寝の宿をとります」が、何んともわびしいものですよ、おしてゐる「難波にかゝる枕詞」

(87)

立わかれ旅に行君幸ましてはや帰りませ旅にゆくきみ

明和五年 八ノエ 「十月伯孔の東都に旅たつを送る」 伯孔「友人の名、則、東都、江戸、東京への旅に出かけられるあなた」の幸せと、早く無事帰ることを祈念して

(107)

います。

清き渚錦の浦とまはけしみ帰りはやと君に告ぐらん

明和七年 約ス「吉田義昭のいせにまうてたまうとおくる」 吉田義昭「友人・友だちが伊勢神宮参拝に行かれる時に贈られた歌。清らかな伊勢神宮に心ゆくまで参拝し、無事帰られることを願っています。あなたにお届けいたします。」

(192)

きよつとしも其初とて白菊の露と共にせ千代は(ぬ)き

明和八年 約ス 親交の養父町の柏刈琴今松から「白菊の露」という名の初しほりの酒を贈られたお礼に詠まれた歌。今日初出荷と贈り下さったお酒は菊花の花に宿る露のように人々から喜ばれいつくまでも盛え続ていくことでしょう。

(452)

千代かけて君かかきなす玉琴に秋の松風しらすめけん

前首と同時作 柏刈の名前が琴今松であることから玉琴今松風の文字と入れて詠まれたのでしよう。あなたが弾けられる琴の音色は松風のように澄んだ清らかな立日を奏でるでしょうと祝意とつたわれたのしょう。

(453)

越中かん箱根の安年よりねもころにやき手向てよからき其道

明和八年 卯酉 八月四日 長兼のあつまに下り給うと送りて、長兼一人の名。長兼が江戸に旅立たれるのを送るの歌。旅の難所といわれている竹相根の山と越えるので、から神さまに幣と手向けて無事越えられる様お祈りして下さい。私も祈ります。

(524)

君がこと名たにのころは困なん住はてぬき世にしあらなくに

明和九年 卯酉 桶狭間に今川義元あしの墓に。虫喰の個所があります。あなたの名前、即ち今川義元の名は歴史の上にいづまでも残っているし、これからも残ることでしょう。いづまでも生きていくことのできなない世ですが、あなたの名前はいづまでも残ることでしょう。

(624)

我ならてひとの国にも音高く鳴海の海をみにこし我ぞ

同上前 「鳴海にてゆくらへよみてつかわす」 ゆくら一人名でしょう。広く名前前の知れ渡っている鳴海ですが、同じように世に名のよく知られているあなたにお会いしたくて私はやそ来ました。よきよしみをといたいたものです。

(625)

おもほ(すと)ふらひきます君に今近江の国つてを聞かも

(651)

明和九年(1772)五月の中こそ淡海のまたしのぬしわかり尋ねき、給える時トまた一人名淡海(近江)からまたしのぬしが突然訪ねて来られたのでしよう。近江の国から来られた人なので、中養父先生始め懐しい近江の人々、近江の国のことなどいろいろお聞きしたいものです。

老人を養う水のみなもとゆ君が八千代になからえぬ(き)

(687)

同前 松井忠貞(あまの)の、若(わか)ゆてふ滝(たき)をたのめる君なれば一(ひと)代(よ)うとも老(おい)せられましと詠み給(たま)えるに答(こた)えてトと前(まへ)書き、松井忠貞(あまの)から「若返(わか)りの滝(たき)の近くに住(す)んでおられたあなたで、すからいつまでも若々(わか)しいことでしょう。老(おい)いふけることはないて、返(かへ)された歌(うた)です。ふるさは老人(おきな)を養(やし)う孝子(ここう)の滝(たき)の源(みなもと)ですから、いつまでも若々(わか)しく長く生きられると思(おも)います。またそうありたいものです。」

めぐりあひし昔の友のおもわもてわが老らくそおとろかれぬる

(711)

明和九年 94 才「わらは友たちなりける人にあまたし斗へてありて」とあるから、ふるさとの
少年時代の友だちに何年振りかに会われたのでしよう。それこそ少年時代、白髪、黒髪
と呼ばれた仲の茂七さんに会われたのではないのでしょうか。ともかくめぐり会った昔の友だちの顔
姿と見て、あゝ自分もあんなに老人の顔になっているのだなあ、と敬慕されたのでしよう。ふた
ん自分ではまだ若いと思つていますが、同年令の人の姿とみて、私だけ若い筈はない。私もあの様
に老人化しているのだと痛感されたのでしよう。

うつし植し軒端の松はかわらぬと千代もいしあろしもいかに

(763)

安永三年 51 才「土月彦根 横山五宗を哭する」彦根の横山五宗の死去と悼ん
で詠まれたもの。移植した松は変わらず、土月々としているのに、いつまでも約束したあなただけ
もうあの世へいつてしまったのですね……

(琉球)

うるまよりあみて渡せる思(思)こもわかあふみには猶しらすけり

安永五年のオ、琉球の田宜薦と、琉球から海を渡って届けられた思、私のところ

近江ではまだ誰も知りません。こも、昔末と編んだ遊(遊)はあつたのでしようが思というのはまだ

なかったのでしよう。新しく目にされてすぐ歌に詠まれたのですね

(321)

人もあれも打たうるかに(俄かた)にわしくもようす(地震)ないにそおとろかれつる

安永七年のオ、十月七日ハツ半時頃(午後三時ころ)地震、突然の地震、打倒され

そうになり、びっくりしました。

(977)

本居宣長とのつながり

安永六年（1787）七月十八日に名古屋と立て、廿日朝本居先生にありてよみて奉る」と前書

いせの海 千尋の渚に 愛八師 玉はよるとふ せいらかに

錦のうらに 浦くはし 貝はよるとふ その玉を ひりひてしかと

たもとほり こしくもしるく 吾背子が 愛^{はし}きまにまに

其かひの かひこそ有けれ やくくに 磯間いたとり

浦つたひ ひりひ得まは 白玉真珠

(834)

伊勢の海の深い所に玉がある、細かい模様の錦を彩る美しい貝、その玉や貝の様に輝やか
しい研究としておられる先生にやま／＼弟子入りを許された、ようやく白玉真珠と拾い得
たような心地であります。

反歌

(長歌の終りによみ添える短歌、前歌の大意を歌い、また補足とするもの)

伊勢の海の清き渚の白玉を袖にこきる、けふ(今日)のためしそ、

安永六年 五月 七月二十日 長年の願望だった本居先生に入門弟子入りと許された喜びを詠まれた長歌の後の歌、伊勢の海辺で白玉と拾ったように嬉し、楽しい今日でした。こきる、一極きとる

(835)

あきつしまの大人なる物を飯高の人とそ人ももとなおもしし

安永六年 「本居先生に奉ずる」 日本一の学者だと信じ、尊敬している宣長先生、まわりの人々もみんなそう思ってお慕ひしております。

(845)

宣長うしのみせ給えるによみて奉る歌として二首

我せかこことおしえし山の辺の三井の真清水くみてそあかし

宣長先生から「山辺五十師原之考」という著書を見せてもらって感激。そのころを詠ましたもの。先生が示された山の辺の学説「真清水のよつに明徹ですりりと真と説いてあることに感服いたしました。

(846)

山の辺のいしの原なる真清水は汲てのちこそとやけしといわめ

先生のすばらしい本「山辺の五十師原」読めば読むほど味わい深く先生の学究の奥深きことに感心させられています。

(847)

本居宣長の道麿の訃報と受けられた時の歌（鈴屋集より）

田中道麿がみまかゝるを悲しみて詠める時は十月の四日になむありける

夢かも およづれかも 道麿は 命しにきと 玉づきの 人ぞ
つけつる え悲し魚 ひとにし見ねは 恋しけく ありけるものを
え悲し魚 えかかし魚 我は悲し魚 よの中に いひつき来たる
神無月 かみなき月と 玉ちはぶ 神もなけれや ことたまの
道いそしみし 道麿を いのちにきと きこが悲しき

この長歌は本居宣長先生が田中道麿公羽の死去と知ってその悲しみを詠まれたものです。道麿が死んだなんて夢の様だ、とても信じられない。久しく会っていないので一度会いたいと思つてたところ。丁度今神無月といわれますが本当に神さまはおられないのでしょうか。あれほど言葉の研究に精進してた道麿。またこれからの研究にも期待をしていたのに、死んだのはまことに非心の限です。先生が弟子の死をこれほどまでに悼まれている。師弟の信頼関係のまことに深いものであったことが偲べれます。

旋頭歌

(五七七、五七七の六句からなり 初の五七七の三句で
一段落となりて 更に別に次の五七七を起すもの)

麻衣 木曾路の川の水かき増れり

いせの海 清き流れに 塩みつらんか

宝曆九年 卯戌 夏が来て木曾川の水かさもふえてきました。その水は
伊勢の海に清く流れこみ 汐が満ちてゐることでしよう

雁金の^{かりがね}雲井とわたる 声聞ゆ也

我為の 秋かと思ふ よはのねさめは

(夜半)

明和六年 卯酉 秋の夜半に目覚めたとき ちやうど空ととぶ雁の
声か聞えて 私の為^{ため}に鳴りそくれた様でした

(147)

鳴海かた 秋の^{もなか}最中の 塩ひつらんか

(今宵月)

こよいてう 月半天に 光みちてき、

安永五年 卯酉 八月十五日の満月 鳴海(地危)の海と美しく輝やかに
照らしています。

(338)

長うた

(五音・七立目の二句と一つの単位としていくつか重ねていき
終りと五七七で結ぶ形式のうた)

日照りをなげく

安永五年 卯ス

やすみし、我大君の キニしおす 大和の国は
千早ふる 神世はしらす くれ竹の よに伝えて
よのひとの い、次くらく 久方の 雨よわひせし
いにしえも かる(しやは 雨ふらぬ 月日の数を
手をおりて かきかそうれば ほときす さなぐ五月ゆ

山すけの

六月過て

くわゝれる

六月もすき

小萩^{ヤキ}

秋風そよぐ

初秋の

七月の末と

月かえそ

月にはよつき

久方の

日には十日を

十かえりに

あまる日数を

大空の

くもりたにせず

わくらねに

土をえさけて

あそ夕の

露たにおかす

百川の

水もたえつゝ

せきいれん

よしのなけれは

うえし田も

けすえかれし

畠さえ

わらははしほみし

花さかす

ほにしもいです

おとついは

あけたいたかれ

きのうけも

くおたかぬゆき

きょうけしむ

せんすへなみに

河に出て 空打守り 天の川 其の川の瀬を
せまかけて よと、なまつ、 久かたの 雨たまわねと
ころには ちえにいのれと 玉ちほう 神も受すそ
成にけらしむ

おと昔も雨乞いとしたでしようか。このころ雨の降らぬ日が続いて、五月も六月も過ぎ七月も末になつてしまいましたのに、たまに曇云も風がやると吹きけらうてしまつて土は乾き裂れ目が出来さほどに 朝夕の露も降りません。どの川も水枯れになつてしまひまして、田に水を入れようにも水がなく田も畑も、葉は萎れ穂も出ないあわれな次女になつてしまいました。困り果て、空を仰ぎ、天の川と堰き止めて雨と下さいと一心にあたのみしますのに…… 神々も願いとさし止めて下さらないのだろうか。

山を祝う

安永七年 廿五

高山は

あやしき物が

あまげには

霞棚引

夕けには

きり立わたり

春せれば

花さきにけり

秋つけは

紅葉におり

岩には

こけむしをかえ

川へには

たきら浪よる

岩けろの

ときわなること

川波の

たえせるかこと

万代に

君はいませと

ことほぎもつす

高い山は不思議なものですね 朝の霞、夕への霧、春の花、秋の紅葉と、山石に
まがが生え、川波がたぎち、山殿石の様に川波の様に、いつまでも、君の代が続き
学えます様に願っています。

新築と賀

有尾（詠みてつかわす

安永九年 57エ

まつけの
松木乃

ときわ
常盤堅盤尔

かしのけの
檀木乃

いやたちさかえ
弥立栄

うますこの
産子乃

いやつがつぎに
弥継尔

まさきつら
正木葛

たゆること
絶事無

いくよかも
幾世鴨

ゆききのいえに
往来之家尔

かたはらに
片原尔

まなき
真木柱立

ことさら
事更尔

にいむろ
新室造

かあふなす
香青成

たみとりしき
置取敷

たぬしけく
多怒志気久

すますあみせは
住為吾花首者

はなゆき
花木乎

そのべにうえなへ
園辺植

ときどきの
時々乃

はな
花将見登鴨

あまにゆうな
朝夕尔

有尾(人名)へ家の新築を祝して送った歌でしょう。おと昔から立派な家に来たあなたのお家ですが、今度新築され、青畳の白う中に庭には時期くに咲く花木を植え、朝夕とお楽しみみのことまことに結構に存じます。心からお祝いたします。

加賀茂真淵の十三回忌に 天明元年 卯酉 十月三十日

ちはやふる 神の御代より 伝わりし その古言を

つばらかに たとりしりまし まつはらに せとりましける

あがた居の 加賀茂のうしは とうとみて 人みなあおき

ともしみて 人みなしぬび 人皆し わすれそかゆる

ことをも名をも

鳥がなく	東の国の	ひざしなる	大城のもとに
縣居に	いへをうして	いにしへの	ことつたてし
あがための鴨の大人		いましも	君がいせをゆ
古言と	人みなしりて	人皆の	しぬびぞわたる
あがためのかものつし			

(1036)

反歌

武蔵野のそくきがきいし音のみも

名のみも吾はわすれかねつも

(1037)

かものまぶら
賀茂真淵
あがためのつし
一果居大人
一本居宣長の先生

しぬたり惚ぶ　ともしみり羨ましく思ふ

古く昔から言伝えられて来た日本古来の言語と深く研究された
加賀茂真淵先生の業績を讃え　その十三回忌にあたり門人たる
の歌と収録された「手向草」の中におさめられた歌である。
後世の人々がみな仰ぎ尊び　決して忘れることの出来ない偉大な業績
は先生の御名と共にいつくまでも語り継がれていくこととしよう。

あとがき

比較的わかり易いと思われるうたと二百首近く選び出し、私
の解釈をつけ、思いと一應仕上げるに及びました。

果してこれで多々の人に親しんでもらえるだろうか、子どもたちも
読んでくれるだろうか、不安は広がるばかりです。

それにもまして道磨さんが「わしはこんな人間じゃないよ」「わしの思
いどちがうよ」と苦笑されて居られる様に思えてなりません。

石子顔乍らみなさんのお叱声、指道寺と是非お願したく存じます。
そして今後とも道磨さんともつと仲よくなりたいと念じています。

終りに失礼乍ら勇気付けやお励ましを戴きました。町学芸員の中

島和哉氏 松阪本居宣長記念館の吉田悦之先生 お近くで古語
しらべにお力をお借りましたありがとうございました 西岩道の西脇則雄氏に石まご御
礼申上げますと共に今後ともご指導の程よろしくおねがい致します

平成三十二年九月十五日

山 口 一 易

道麿さんの歌

田中道全集 解釈編 一

発行 平成二十一年十月四日

発行者 田中道麿翁顕彰会

養老町教育委員会

印刷 西濃印刷株式会社